寄せ太鼓

北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号（〒807-1261）
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

勇壮・華麗に山笠が舞う
筑前木屋瀬祇園まつり
7月8日(土)・9日(日)

木屋瀬の夏を彩る祇園まつりが近づいてきました。本年は七月八日・九日の両日執り行われることになります。

まつりの賑わいの中心となる山笠については本年も山笠会館において青年会の皆さんを中心に創作が進められています。

この山笠の人形創作に伝統・行事祇園まつりに注ぐ若い人の熱い思いが込められています。

木屋瀬祇園まつりは例年五月段階の須賀神社氏子総代会において実行委員会が立ち上げられまつりの運営について協議が進められます。輪番制による本年の当番町は、青山が新町、赤山が本町となっています。

当番町は、山笠の運行責任に加え二日間に亘る飲食接待を受け持つだけに町内総出の出仕が求められます。各町内とも世帯数の減少や高齢化により苦しい対応を余儀なくされていますが総取締役を中心に一丸となって遺漏のないよう努めています。

このまつりの費用については各町からの負担金と寄付金によって賄われることになっています。当番町としての負担も相当大きなもので物心両面での苦労が偲ばれます。

本年の総取締役は青山が奥永芳光さん、赤山は数住宗貴さんが務められることになります。

まつり本番は、お汐い取りに始まり両町の事務所開き、山笠の巡行、山笠奉納、宵山笠、追い山、宮入と流れに沿って進められます。

その中で木屋瀬祇園のクライマックスは、なんと言ってもまつりの最後を飾る宮入行事であります。花火を合図に最初しずしず終り脱兎のごとく祇園町通りから須賀神社に駆け込み、山笠をがぶり、転がし、回して華やかに舞う姿は勇壮にして華麗なもので観客が最も興奮する場面でしょう。

このように歴史と伝統のある木屋瀬祇園まつりが営々と継承され、成功裡に幕が引けますよう住民の皆様の絶大なご協力を切にお願い申し上げます。

木屋瀬宿記念館運営協議会
広報部会長　徳永興紀

たなばた 七夕まつり
8月5日(土)開催！

毎年恒例のたなばたまつりを8月5日（土）に開催する予定です。今回も人形劇や天体観測等楽しい催し物を多数予定しておりますので、ぜひお越し下さい！

皆様のお越しをお待ちしております。

子ども達による太鼓競演会も
第16回木屋瀬芸術祭

5月の連休の3・4・5日に今年も「第16回木屋瀬芸術祭」を実施しました。今年は少しリニューアルしております。

初日は、毎年のように全国マーチングコンテストで優秀な成績を収めている木屋瀬中学校吹奏楽部の演奏で例年通り開幕しました。今年の入部者は若干少ないということですが、少数精鋭で頑張ってくれることと期待しています。

この後、子どもたちによる太鼓競演会を初めて実施し、大谷稲荷神社桜太鼓、相生祇園太鼓、そして木屋瀬祇園太鼓が勇壮に披露されました。この競演会は参加団体を増やして行きたいと考えております。

二日目は、恒例となりつつあるハンギングバスケット講習会、こやのせ座落語会、筑前六宿連携事業実行委員会のメンバーによる講演とフォーラムへと続きました。

三日目の最終日は、第14回筑前郷土芸能連絡会議の開催で、各地に伝わる伝承盆踊りの披露があり、木屋瀬宿場踊り保存会は毎週練習を行っている子どもたち15人も参加し、他の保存会へ大きな影響を与えたのではないかと思っています。さらに昨年に引き続き八幡西区コミュニティー支援課の荒田健史課長のギター漫談や演奏で大いに盛り上がりました。

最後に、貴重な連休をボランティアに当ててご協力いただいた皆様に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

木屋瀬宿記念館運営協議会
運営部会長　山田　靖

わたしの昔話

【柴田豊廣遺稿集】より

■太陽信仰（お日待ち）

原始から日本人は日の出は太陽の生命の出発であり、同時に我々の生命の出発とも信じていました。そしてお日さまより、今日の幸福と安全を恵まれるものと信じていました。こうした大事な事が毎日くりかえされているので、皆が集まり日の出を拝んでいました。これがお日待ちと呼んでいた太陽信仰です。

近世では一年の間に正月、五月、九月と三回行われていました。農産物とお日さまは、重要なかかわりがありますので、農産地区で盛大に行われていたと思われます。町内や隣組と言った集まりで、飲食物や酒肴等を用意して、前夜から日の出を拝む場所となった当番の家に集まり、一年一度の仲良し組合の人達の、親睦を深める楽しい夜の集まりとなります。酌むほどに酔うほどに賑やかとなり、この夜一席だけと言う賭博も始まります。他に楽しみのない時代の仲良し組合の人達が、はめをはずした愉快な夜の集まりとなっていました。こんな事で、お祭り行事より遊び事の方が盛んになってゆき、ついには風紀を乱す組も出来たりしました。これだけが原因とは思えませんが、自然にお日待行事は消えた所が多くなりました。

■勇躍念佛（ぼん踊）

鎌倉時代の中頃、念仏を唱えながら踊る勇躍念佛と言う信仰を、一遍上人が興こされた。念仏踊りとも言われ、嬉しいな、楽しいな、ありがたいなと思う心を自分の全身を踊らして表現するものである。

一遍上人は、この勇躍念佛を祀る方法にされ、ぼんに仏さまの前で踊られたのでぼん踊りの初まりと言われている。又木蓮上人が地獄の釜が開く事を喜び、蓮の葉をかぶり踊り狂ったのを、ぼん踊りの初まりと言う人もある。

木屋瀬の宿場踊りは、盆に踊る最後の踊りをまつる人のない仏の供養に踊るので、四方の無縁仏に向う意味で、必ず十字路で踊る。この踊りの頃は夜も更けているので、小さな踊り子はおうちへかえす。踊りの輪はベテラン揃いとなり、自分の踊り姿を自分の心に映していてか夢心地である。三味線太鼓に歌に掛け声、夜半の町に澄み渡る。この最後の踊りを踊り納めないと、盆孤が落ちないと言われている踊りである。

「なごりつきせぬ、きぬぎぬや」とそれぞれに思い出楽しい踊りである。「明くれば野辺のしおれ草」とお月さまも静かに見守っていて下さる、これで終りとなる夜露の中の踊りである。

本町　柴田由美子

企画展報告
第65回企画展 長崎街道ひなまつり
木屋瀬宿～立場茶屋銀杏屋

第65回企画展「長崎街道ひなまつり　木屋瀬宿～立場茶屋銀杏屋」《平成29年2月16日（木）～3月20日（月・祝）》は、昨年度行いました第61回企画展「長崎街道ひなまつり木屋瀬宿～立場茶屋銀杏屋」に引き続き、石坂の立場茶屋銀杏屋と木屋瀬のもやいの家、旧高崎家住宅（伊馬春部生家）、木屋瀬宿記念館の４施設連携で行いました。それぞれの施設で趣を変えて、古式の雛飾りやさげもん等の展示を致しました。今年初となるイベント「木屋瀬　お雛マルシェ2017」や江戸あかりの民藝館主催「雛道具、珠玉の名品展」も開催され、期間中1545名とたくさんの方に来館していただきました。ありがとうございました。

新職員紹介

学芸員　石田　裕佳

中間市出身です。現在の町並みにも通じる木屋瀬の歴史の素晴らしさを少しでも多くの人に知ってほしいと思っております。まだまだ未熟者ですので、社会人として至らない点があると思いますが、よろしくお願いいたします。

29年度の新体制が発足しました

木屋瀬宿記念館運営協議会 第17回総会開催

さる4月21日（金）19時から、こやのせ座で長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会の第17回総会が開催され、平成28年度事業報告及び決算、平成29年度事業計画及び予算が承認され、さらに役員改選が行われ次の体制となりました。

新体制は、理事長に木屋瀬商工連盟の山田靖さん、副理事長にみちの郷土史料保存会の和田亀男さん、事務局長に宿場木屋瀬街づくりの会の野口靖彦さん、広報部会長に木屋瀬老人クラブ連合会の徳永興紀さん、理事に自治区会の高宮歳継さん、宿場おどり保存会の藤嘉量さん、木屋瀬商栄会の松尾洋輔さん、木屋瀬青年会の舩川大十さん、監事にまちなみあんないの会の近藤浩さんとみちの郷土史料保存会の髙野義仁さん、みちの郷土史料館運営部会長に和田亀男さん、こやのせ座運営部会長に山田靖さんがそれぞれ再任されました。本年度も地区の皆様のご支援・ご協力をよろしくお願い致します。

なお、こやのせ座運営部会では、運営を手伝っていただけるボランティアを募集しております。ご協力頂ける方は、記念館までご連絡ください。

木屋瀬宿記念館運営協議会
運営部会長　山田　靖

シリーズ

筑前木屋瀬宿 神仏めぐり
第四十回 大義山 永源寺
～お地蔵さんの名前の由来～

わが国には、「仏」と名のつく仏像が寺院や博物館、家庭の仏壇、路傍に多くまつられ拝まれています。仏というのは、釈迦（ブッダ）の事でもあり、悟りをひらいた人、目覚めた人の意味でもあります。

佛教の開祖である、釈迦は今から二千五百年前インドとネパールの付近で生まれた実在の人物です。釈迦が亡くなったあと、後世の弟子や信者たちは、追慕の念やみがたく、何らかな形を通して釈迦の教えに触れたいと願い、北インド地区で初めて、仏像が作られました。始めは釈尊像だけでしたが、その後、釈迦が説いた教えの中から、いろいろな仏や菩薩が生まれました。又、バラモン教やヒンズウ教の神々も仏教に取り入れられ、仏の守護神となったものもあります。

仏像というのは、人々の思いや、願い、仏の慈悲の心を形にしたものです。

さて、地蔵菩薩は、インドのバラモン教から生まれた仏で、六道輪廻に苦しむ衆生を、仏の道に導き救済することを委ねられた菩薩です。六道とは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の事です。人は、六道を輪廻すると信じられ、地蔵尊は、六道輪廻の子供達の救済に特に力があると信じられてきました。

永源寺山門前のお地蔵さん

永源寺の山門の前に、お地蔵さんがあります。愛称を「越つあん地蔵」と言います。名前の由来は、嘉永七年（一八五五）、今から約百六十年前、お地蔵さんのお披露目の時、お地蔵さんは、白い布で覆ってあったのですが布を外すと、地蔵さんのお顔が、住職の越竜禅師にそっくりなので、「和尚さんが、お地蔵さんになった、越つあん和尚が地蔵に成った」と子供達が囃し立てました。それから、この地蔵を「越つあん地蔵」と呼ぶようになったと言われています。

この地蔵さんには、もう一つ愛称があります。「鼻欠け地蔵さん」と言う名前です。その由来を本町の、故岩尾四十三郎さんが童話に残されています。ある夏の日、木屋瀬に大洪水がおこりました。船で避難していた子供たちが流されそうになりましたが、船がお地蔵さんにぶつかり流されず子供達が助かりました。しかし、その衝突の衝撃でお地蔵さんの鼻が欠けてしまいました。何度修理しても、鼻は欠けるので、子供達は鼻欠け地蔵と呼ぶようになったというお話です。

今もお地蔵さんの鼻は欠けて、のっぺらぼうです。岩尾さんは、お地蔵さんの歌も作られていましたので、一部だけ紹介します。楽譜も残っています。

永源寺の地蔵さん

一　永源寺の永源寺の地ぞうさん
　　にこにこ笑顔でよだれかけ
　　雀と遊んでいるうちに
　　お年が百になんなった。

二　しあんばいしょの盆踊り
　　ゆかたにあみ笠三度笠
　　月の夜ふけに踊るのも
　　にこにこ地ぞうさん
　　見ちょんなる

六道の人間界や桜咲く
花の宴昔大火の避難場所

宿場木屋瀬街づくりの会
会長　野口靖彦

幕末の長州奇兵隊と各藩の農兵

③福岡藩農兵隊の終焉

木屋瀬みちの郷土史料保存会　松尾　良美

藩の存亡の危機に際して、領内の農民や商人等に呼びかけて結成した高杉晋作の奇兵隊の活躍を目にした各藩も兵制を改編した。

福岡藩も慶応元年藩主黒田長溥が従来の兵制を改め、西洋式軍隊への転換を計り、一般庶民からの志願兵を募集を行った。

その志願募集条件に、もし従軍した折りに苗字帯刀を許す・壱人に付拾両を下賜・戦いが終了し凱旋した時は後々迄永代弐人扶持（生存中に一日に付米一升）支給・更に「前借候処壱人ニ付弐両宛御渡ニ相成」の御触書なので、その日暮らしに困っている町人や百姓は勿論、博奕打等のあぶれ者達が「我も我」と従軍を志願したそうだ。鞍手・遠賀郡内百五拾五ヶ村で四百人の農兵が採用となり、農兵隊組織は農・商人拾人を以て一組として、小頭壱人を置き、三組を「壱縊りと相定」村庄屋を頭取に任じた。郡内の農兵で惣頭取には大庄屋が任命されて、之を統括指揮した。一ヶ月に三日を定めて、藩士の指導のもとに西洋式調教に訓練を励んだ。「本農兵御達之覚」によると次のように定められていた。

「一、郷銃手中弐人扶持被下候事　一、帯刀苗字御免事　一、稽古中御賄被下候事　一、稽古中玉薬御渡候事」以上の事は、苗字・名乗や帯刀が許され、弐人扶持が支給されると共に、稽古日の賄（食事）は藩が行うとの事である。訓練を積んだ農兵達は藩の正規兵の武士と共に戊辰戦争（鳥羽・伏見戦）江戸の上野での彰義隊征伐や将軍慶喜追討の東征軍の一翼として、会津追討をめざして奥羽各地に転戦して活躍したのである。

資料の「福岡藩史」によると、奥羽鎮撫総督軍を編成した従一位左大臣九条道孝は総督として京都を出発した。当時の新政府の考えは、鎮撫征討軍の兵力は僅かであっても、錦旗と名門五攝家の九条家の威光によって奥羽諸藩は必ず服従し、会津追討は容易であろうと過信していた。戦火が東北地方だけでなく越後方面迄拡大するとは思っていなかった。

奥羽鎮撫総督軍に従って、各地で奮戦している農兵隊を含む福岡藩将兵は、明治二年正月に福岡へ凱旋するまで、会津・仙台・米沢藩を中核とする奥羽越後列藩同盟と戦った。

調練行列図

三十藩に及ぶ奥羽諸藩は、松平容保の会津藩の寛典（帰順）を数度に朝廷に嘆願したが、その都度却下された。それで、福岡藩を含む東征軍は抵抗する奥羽諸藩と各地で攻防戦が続いた。

この戊辰戦争の終結に至る迄に、福岡藩の出兵人数は二千三百七十人で、戦死者六十六名負傷者八十四名であった。戦争の終結により東京に凱旋し、暫くの期間慰労のため休暇が与えられたので、戦陣での労苦を休める傍ら東京市内の見物に数日を過した。農兵を含めた兵士達は、東京を出発して京都に入り、東京で朝廷より下賜された黒呉服・陣羽織・坊主合羽の軍装であった。御所に於て酒肴の下賜があり、特に秋田に於て孤立して奮戦した部隊に対しては、天皇に拝謁し戦いの労苦を賞讃されたという。故郷に錦を飾る事となり、大阪見物を済ませた後、瀬戸内海を下り宮島を参詣し、黒崎を出発して元旦は赤間宿で迎え、正月三日青柳宿をたち、箱崎八幡宮を参拝し、それより隊列を整え正午に福岡に鼓笛隊での演奏で堂々と行進して帰着した。

戊辰戦争の終結で従軍の諸藩に戦功賞典が行われ、藩主長知に壱万石の加増があり、藩主も出征将兵の論功行賞を行った。「将士禄を受くる差あり、戦死者殊に優せり」と記録が残っているが、戦死した下級武士や農兵達には、加増額は僅か切米二～三石に過ぎず、あくまで上厚下薄の賞典（恩賞）であった。

戦死者は、福岡市東公園に松原招魂社を建立し霊を慰めたが、現在は六本松の護国神社境内に招魂社と旌忠祠が移転されている。

さて、庶民からなる長州藩の奇兵隊が討幕明治維新の成立の本家本元であったが奇兵隊諸隊が脱退騒動を起し各地で賞遇に不満で、藩庁を包囲すると手段をとったので最終的には藩政府軍に敗れた。戦闘を終ると死者六十名負傷者七十三名、投降者の取調が始まり千三百名うち死刑となった者百三十三名を数えた。

彼等の刑死と共に、奇兵隊諸隊の幕府討伐の栄光は消え、維新実現の最大の功労者の末路にしては全く哀れな出来事である。

およそ10年間にわたり連載してきました松尾良美氏による連載は、今号をもちまして終了させて頂くことになりました。これまでのご愛読、大変ありがとうございました。また、古文書から木屋瀬の歴史の一端を読み解き解説頂いた同氏にも、関係者一同感謝を申し上げます。